

月刊

いじろのとも

第九卷

十二月号

ひたすらするだけ

毎日まいにちする

ヨーガは

何も見えない

大海での一かきに

似ている

効果は分からなくても

ただしたことだけが

自分でわかるもの

煩惱の追求こそ

業ふかき

現代人は

煩惱の

追求こそが

生き甲斐となる

人生を考え直して

みたい人は（五九）

『正法眼蔵』解説（三）

現成公案を続けます。

自己をはこびて方法を修証するを迷いとす、万法すすみて自己を修証するはさとりなり。

逐語訳に近い玉城康四郎氏の訳は次の通りです。

自己が主体となって、環境世界を実証するのが迷いである。逆に、環境世界が深まって、そのなかで

自己が実証されるのが悟りである。

今回も、この部分に関する解説を、何冊も読んでみました。でも、私がこれは正しい、あるいは道元の意を十分汲んだ読み方だと思えるものは、残念ながら一つもありませんでした。ある本によりますと、曹洞宗の中には、正法眼蔵の解釈を重視する立場の人と、実践（座禅）を重視する立場の人とがあるようですが、前者の正法眼蔵の解釈を重視する立場の人たちの書いたものも、ダメな本の中に、勿論、含まれています。ですから、曹洞宗の

中には、道元の真意を理解できる人が、これまでに、あったのかどうか疑問にさえ思えてしまいます。とても、残念なことです。

さて、右にあげました、本文と玉城氏の現代語訳とを、何度も、何度も、読み直してみたいと思います。お分かりになりましたでしょうか。

失礼ですが、多分、何のことだか、よくお分かりにならなかったのではないかと思います。でも、分からなくても、暗記できるほど、何度も何度も繰り返し読むことは、大切なことなのです。

以下、私の理解したところを、書いて行きたいと思えます。

まず、難しいことばですが、「はこぶ」と「万法」と「修証（しゅじょう）」「ぐらいでしようか。

万法はすでに、出てきました。仏法といってもよいものです。この世のあらゆる原理、逆に言いますと、宇宙根源の原理と言ってもよいと思います。

はこぶは、自己をはこぶということ、自己のはからいといったほどの意味ですが、実は、この「はからう」ことの「真の意味」を理解することが、この部分を理解するうえで、決定的に重要ですので、詳しくは後回しにします。

残りは修証ですが、これは、文字通り、修行すること、その証（あかし）を得ることです。つまり、修行して悟りを得ることです。

さて、本文の「自己をはこびて万法を修証（しゆしよ）するを迷いとす」ですが、なかなか、意味深長で、味わい深い言葉です。それに続く「万法すすみて自己を修証するはさとりなり」と合わせて読みますと、とてもよくできているように思えます。

仏教の古典を読むときに、常に気をつけなければならぬことなのですが、ここには二つの観点が集約されています。そのために、理解することが難しくなっているように思えます。

一つは、私の理論でいう、「他己」と対峙（たいじ）すべき「自己」が対になっているという観点であり、もう一つは、自己を「はこぶ」という言葉と、万法「すすみて」という言葉から、そこに、自分が「はからえる意識的な世界」と、自分では「はからえない無意識的な世界」との対比が存在しているという観点です。

意識的な世界では、法は他己の働きの中にあります。私の理論では「法を目指して、より社会的であろうとする」のが他己です。現代人は他己の働きを弱め、規範性を弱めていますので、法を目指さなくなってきました

し、また社会的であろうともしていません。いわば、意識の世界で自己をはこぶことばかりを考えています。そういう意味では、迷いの極致にいますと言えます。しかも、悪いことには、「万法を修証」しようとしていないということです。

たとえ、意識的な迷いの世界とは言え、法を目指すことは大切なことなのです。悟りと迷いという対比から言いますと、自分からはかつて、万法を修証しようとすることは、迷いなのですが、でも、はからわないで、「ただひたすら」修証しようとすることは、大切なことなのです。自己のはからいを捨て、どこまでも、聖人の教え（意識の世界での法）に則（のつと）って修行・精進することは、人間として何にもまして重要なことです。それは、意識を超えて、無意識に至る道でもあるからです。

そうした精進を重ねているとき、次の「万法すすみて自己を修証する」ことができるようになります。しかし、それは、意識的な世界でのことではありません。ここが、分かりにくいところなのですが、自分の他己の中の無意識に宿られている仏さま（無意識の世界での法・如来蔵識）の方から、突然、あるいは気づかぬうちに、自己の方へ訪れてこられるものなのです。私の理論で言いますと、生命蔵識と如来蔵識の無意識での統合が、自

分のはからいを越えて、気づかぬうちに起こっている、ということなのです。それを、道元は「万法すすみて自己を修証する」と表現しているのです。

肯定は肯定、否定は否定の、いわゆる世間（世俗）をすべて否定し切ったところ、つまり「自己をはこびて万法を修証する」世界を否定したところに、「万法すすみて自己を修証する」世界が、意識を超えて実現されるのです。それは、悟りの世界と言えるものです。前回も述べましたように、そこでは、すべてが肯定できる世界になっ

ては、すべてを肯定できる悟りの世界とは、どんな世界なのか、皆さんの修行・精進の動機付けになればと思

い、少し余談になりますが、述べてみます。（でも、これは結果です。執らわれてはなりません。）
まず、時間・空間に関して言いますと、そこでは、時間・空間を超えて永遠・無限が訪れてきます。それは、過去と未来が統合されて、この現在がすべてになるという

の中において、大海を知る「世界と言えるのです。それは、意識としては、すでに何万年も生きてきた実感となりま

すし、これから先、何年生きるかが、まったく気にならなく

なりす。つまり、人間にとって決定的な否定である「死」を超越することが

できるのである。人に「あなたは何才ですか」と問われれば、冗談ではなくて、「仏さまと同じ年です」と

答えたくなくなってくるのです。こうした境地は、老子で言

いますと、無為而無不為

です。次に、自分の思い通りでなかった自分の「生」も、すべてが肯定できるようになり

ます。産まれ落とされた自分の環境も、自分の素質も、たどってきた経

歴も、すべてが、感謝できるものになっ

てくるのです。それは、仏教の言葉で表しますと、すべてが因縁であ

ったと言えるものにな

るといふことです。こうした境地にいたることが、宗教家としての、あるいは人間としての、教育基本法や人権宣言のことばで言

いますと、「人格の完成」なのです。宗教家の最終目標

なのです。それは、空海や道元が言いましたように、人間にとつて、どこ

までも「くらく、くらい」生と死を、宗教家の一生の仕事として「あきらめる」ことだ、と

言えるのです。

自作詩短歌等選

宗教を分からせるには

宗教を拒否する

現代人に

宗教を分からせるには
どう説明したらよいか

自分を越えたものの力を
知ること

そんなものはない

信じるのは自分の力だけ

他者に優しくできること

障害者にも優しくできる
こと

障害者が自分と同じと
思えること

自分を制御できること

そんな必要はない

自分こそ守るべきもの

満足していて

我慢するものは

何もない

でも

何だか不安

民主主義は意識の世界

民主主義は

意識の世界

白か黒かを

決める世界

強者が弱者

に勝つ世界

個性は孤性

個性は孤性

個性を主張するほど

人は孤立し

社会は崩壊する

個性的な教師を

養成すべしとは

癖のある教師を

作って

社会を崩壊させたい

のかなあ

法への信頼感

裁判所の判断が

常識から乖離し

相対化して

法の権威は

失われている

国民の

法への信頼感は

ますます失われ

あらゆる人が規範性を

希薄化している

やめたい百姓

百姓も

十年前は

まだやれた

いまは誰もが

やめたがつている

人間関係の希薄化

日本人は

昔は

ここるところで

つながってきた

でも

今は

欧米人がもつような

建前も

新たに作れず

ここるところも失って

人と人のつながりが

どんどん

希薄になってきている

あたまだけの現代っ子

あたまだけを

発達させられた

現代の子どもたち

ここるところと

からだ

たましいを

どこかに

置き忘れている

若者にとっての宗教

若者に

とって宗教

何なのか

危うきものと

のみ映りしか

自分に照らして

人は

悲しいかな

自分に照らしてしか

人を見ることが

できません

私の

純粹な愛他の行為も

愛欲と見えたり

金欲・財産欲と見えたり

自分の都合のよさと

見えたりします

でも

それが

自分の執着の

反映とは

決して思いません

悲しいかなです

でも

慈悲とは

そういうものです

自分の間違いの反映

真の自己に

到達していない人

にとって

他人が間違っていると

思えるのは

自分も

間違っているから

学部の子生

と接すると

凡聖逆謗を

度々感じる

自作随筆選

小林よしのり『戦争論』

毎日新聞に2回にわたり、「ゴーマニズム宣言」で有名な、若者に人気のあるマンガ家・小林よしのり氏の最近作、『戦争論』というマンガが、二人の評論家により話題にされていました。一つは、十一月六日付けで出た、加藤典洋氏の「『戦争論』を読む」と題する記事であり、もう一つは、十一月二十六日付けで出た、香山リカ氏の「『戦争論』をめぐる」と題する記事です。

私は、そのマンガを買っていませんし、読んだこともないのですが、今年の7月に刊行されて既に五十万部売れたと言います。識者の間で、たいそう、話題になっているようです。たとえば、香山氏の記事の中で、このマンガが、三つの雑誌（世界、論座、正論）の十二月号で特集として取り上げられている、と述べています。

このマンガの内容は、これらの記事によりますと、大東亜戦争を肯定するものだそうです。

このマンガも、これまでと同様に若者にうけているようですが、なぜ、それが若者にうけるのか、その理由の

究明と同時に、小林氏が大東亜戦争を肯定することに、果してどういう意味があるのかが、問題にされています。この二つの問題について、識者たちは、さまざまに論じているようですが、それらは、右の毎日新聞の記事や雑誌などで確認して頂くとして、結論的に私の考え方を述べてみたいと思います。

小林氏は、現在のあまりにも利己的な若者に危機感を抱いており、それを、個を重んじる戦後民主主義の弊害が出たものとし、今こそ「個を捨て、公のために生きること」が必要だ、と説いているようです。

私も、この見方そのものに基本的には誤りはないと思います。私は、この日本の若者たちに、いま典型的に現れている、さまざまな問題を、現代があまりにも「自己社会」に成り過ぎたせいだと考えていますし、「個を捨て、公のために生きること」までは言いませんが、公を取り戻し、個（自己）と公（他己）のバランスを取ることに大切だ、と言っています。

小林氏は、「公のために生きる」モデルとして、大東亜戦争肯定論を展開しているようですが、私は、それは、極めて危険だと思えます。なぜなら、今や戦争（暴力）を肯定する雰囲気、若者、いな大人にも存在するからです。マンガを売るためには、面白い構想だと思えます

が。ではなぜ、自己肥大社会になれば、暴力や戦争を肯定する傾向が生まれるのでしょうか。

多くの論者が気づかないことなのですが、そもそも人間は、他己の働きによって、社会（＝他者・最終的には絶対他者である神・仏）に定位していないと、不安になるのです。そして、その不安を解消するものは、自己の情動（欲望・情緒・気分など）の追求なのです。

欲望には、大きく分けて、食欲と性欲と優越欲があります。それぞれの欲望を、現代ほど追求している時代はないように思います。

この中の優越欲は、聞き慣れない言葉ですが、これは他者に優越したいという欲望で、他者への攻撃性になったり、他者より優れた地位に付いたり、権力をもちたいといった出世欲などとして現れます。また、他者に勝ちたいという攻撃性は、さまざまスポーツとしてルール化されます。いま、スポーツがどれほど隆盛をきわめているかは、その報道にさく新聞紙面の多さを見れば明らかです。さらに、人間は「万物の霊長」などと、おこった意識をもつたりします。

暴力や戦争の肯定傾向も、この優越欲によるのです。小林氏のように、公に生きると言いながら、戦争を肯定することは、私に言わせれば、実は、他己を失って、自

己をますます肥大化させるだけに終わるのです。つまり、それは、真の公を取り戻すことにはならないのです。

真の公は、他者、それも私たち人間の力を超えた力、つまり絶対他者を信じ、それに則（のつと）って生きることによつてのみ可能なのです（最終的には、無意識に宿る「生命意識」と「如来意識」の統合による）。

自己を肥大化させますと、自分が空虚になり、社会定位できなくなります。そうなりますと、人間は不安に陥ります。その不安を解消する一つの方法が、戦争に代表されますように、他者に勝つこと、他者を支配し、服従させることなのです。しかも、「正義」の名によつて、そうすることなのです。

いま、日本人は、自己を肥大化し、最大限の自由を謳歌しています。でも、本当の自由は、自由を否定したところにはしかないのです。つまり、それは、不自由の自由なのです。そのためには、自己の否定の契機を持たなければなりません。それを欠いた自由は、他者に優越・勝利する無制限な自由を生み出していきます。（余談ですが、現在のアジアの経済不況も、この無制限な経済的自由によつていると、私には思えます）。

こうした理由で、公に生きるモデルとしての「戦争肯定論」はきわめて危険だと言えるのです。

子どもに禁止する理由

毎日新聞では、毎週日曜日に、各界の著名人による評論が「時代の風」と題して、載っています。

十一月二十九日（日）は、人気作家の高村薫氏が「危機を迎えた子供たち 類を見ない自由の肥大化」と題して、「大人ならしてよいことが、なぜ子どもでは禁止されるのか」について、長いこと考えた末、その解答をやっと得たことについて書いていました。禁止されることとは、例えば、大人向けの雑誌やビデオを見たり、援助交際をしたり、たばこや酒を飲んだり、することなどです。

その得た結論とは、「子どもはいまだ未完成の人格だから。・・・子どもにも人権はあるが、それは必ずしも大人と同等の人格を意味するものではない。発達途上の未完成の人格だからこそ、大人が心を配り、その行動に然るべき制限を加える必要があるのだ。」というものです。

私は、この結論を読んで、これで果して子どもが納得するのか、疑問に思いました。これは、学校で、中学生に「なぜ、喫煙や飲酒してはならないのか」を説明するのに、教師がよく使う手だと思えます。また、こうした

説得が通用するのは、子どもの体力や判断力が未熟で、責任能力に限界があるような場合に限られるのではないかと思います。例えば、子どもには、刑事責任を課さないとか、選挙権を与えないとか、運転免許証を与えないとかです。でも、いま問題となっていていますのは、主として享樂的だと言えるものです。

右の説明だと、二十歳を過ぎたら、人格が完成して、それが突然、善いことに変わる、となぜ言えるのかが説明できません。（果して、高村氏自身、人格が完成している、ご自分で思っておられるのかどうか。因みに、私にとって人格の完成とは、解脱・開悟のことです。）

この問題については、私は、もっと深い内省に基づいた、真摯な説明がいたると思えます。

よく考えてみますと、大人がしていて、子どももやりますが、それを無理に禁止しなければならぬようなことは、みんな大人もすることをばかるとすべきものであったり、できるだけしない方がよいことなのです。ポルノにしても、売買春にしても、飲酒・喫煙にしても同様です。因みに、積尊は、人間が守るべき最低の戒律として
不殺生、 不偷盜、 不邪淫、 不妄語、 不飲酒の
五戒をあげておられます。売買春は、 不邪淫戒に反しますし、飲酒・喫煙も、 不飲酒戒に反しているのです。

ですから、大人がこうした文化（悪文化）を否定して行かなければならないのです。大人が反省することもなく、子どもにだけ禁止しても、子どもには説得力はありません。あらゆることがお金に換算される世の中で、子どももお金を欲しがっています。世に邪な性行為（不邪淫）という概念がなくなっている現在、性を楽しむことが可能になるや、それは、あらゆる人の権利と考えられます。ですから、お金をもらえ、性行為を楽しめる援助交際は当然のことと言えます。また、お金を与えることを愛情を与えることと勘違いしている親が沢山いる以上、子どもはお金をもっていて、酒や煙草を買うことができます。ですから、当然、飲酒・喫煙にはしると思われれます。ポルノ雑誌やビデオを買うのも同様です。

個人の自由の尊重、経済的自由競争の是認、表現の自由などが価値あることとされて、何が善なのか何が悪なのか、ここで取り上げた論者の高村氏自身すら、分かんなくなっていると言えます。あらゆる価値は相対化しているのです。みんなが、善い価値とすれば、善い価値ですし、悪い価値とすれば、悪い価値なのです。右に見ました、釈尊が説かれた絶対な価値も、みな相対化していて、それを守って行こう、灯明としようとする人は、大変、少なくなっただけで来ていると言えるのです。

釈尊のことば（七五）

法句経解説

（二六二）妬（ねた）みぶかく、吝嗇（けち）で、偽（いつわ）る人は、ただ口先だけでも、美しい容貌によっても、「端正な人」とはならない。
（二六三）これを断ち、根絶やしにし、憎しみをのぞき、聡明である人、かれこそ「端正な人」と呼ばれる。

ここでは、端正な人が、キーワードになっています。でも、今では、このことばは、ほとんど死語に近いのではないかと思えます。

端正な人とは、この偈では、ねたまず、おしまず、いつわらず、にくしみをもち、聡明な人、ということになります。

現代人は、このすべての価値を尊重しようとしていないように思われます。実際に、私が勤める大学でも、日常的に、多くの教官が、お互いに、ねたみあい、おしまあい、いつわりあい、にくしみあっています。私は、これまで、それをどれほど感じてきたか分かりません。そういう意味で、端正な人と呼べる人は、まったく居ない

とさえ言えます。

端正な人の特徴の最後についている聡明ですが、現代人は、これだけは持っていると思われ、自負するかもしれませんが。たとえば、大学の教員は、自分は勉強ができて、大学の先生になったのだから、聡明さは他の人には負けないと思っているのではないのでしょうか。また、多くの一般の人も、昔よりも高い学歴をもち、親よりも聡明になったと思っ

ているのではないかと思えます。でも、それは間違いです。ここでいう聡明は、いわゆる高い学歴でつけた知識のことをいっているのではないのです。実は、自己が肥大した現代人は、知識をつければつけるほど、それがこころの垢となつて、ますます自己の肥大化をもたらしているのです。

ここでいう聡明は、知識ではなくて、意識水準では、私の言う「情動 感情（こころ）」の働きの「自我 人格（たましい）」の働きの現れと言え

るものです。知識は、「認知 言語（あたま）」の働きの、私たちが生きていく上での手段となるに過ぎません。聡明は、私たちの生きる目的そのものに関わることだと言え

るものです。私たちは、自己を知

ることを目指すと同時に、法を指して生きています。そのバランスの上に生活して

います。聡明とは、こういうことに関わることなのです。つまり、聡明な人とは、自己を知ることを目指して精進している人、法になつて生きようと精進している人のことなのです。

自己を知るとは、最終的には「天上天下 唯我独尊」といえる境地に至ることです。そのためには、戒律を守り、ヨーガ（瞑想）やお祈りをし、聖人の教えを学ばなければなりません。

また、法になつて生きるためにも、同様に、戒律を守り、聖人を信じ、その教えをひたすら守ろうと精進しなければなりません。

こうした修行の徳目として、たとえば六波羅蜜がある

のです。それは、布施、持戒、忍辱（にんにく）、精進、禅定、智慧、の六つです。

偈に出ていましたように、ねたんだり、ものおしみしたり、いつわつたり、にくしみをもつたりすることは、これらの徳目に反しています。ものおしみは、布施に反しますし、ねたみや、いつわりや、にくしみは、持戒や 忍辱に反しているのです。

こうした生き方を目指している人が、この偈に出ています端正な人と言えるわけです。でも、残念ながら、端正という価値はいまや廃れてしまっています。

後記

一、平年並みなのでしようか、寒くなって来ました。お風邪を引かれませんかように。

二、今年も、もう十二月になりました。もう少して、平成十一年になります。『このころのとも』を創刊して、もう、まる九年が過ぎます。

三、今年八月、「人権問題に関する基礎的研究（）」と題する論文を書く（編集する）ために、『このころのとも』でこれまでに書いた、人権に関連しそうな随筆を抜き出そうと思って、全巻にさっと目を通しました。論文に載せましたのは、五編でしたが、その倍ほど、見つかりました。でも、論文の頁（紙）数制限で載せることができませんでした。結構、たくさん書いていることに、自分でも驚きました。後で読むと、やはり書いていてよかったです。

四、このところ、新聞を題材にして随筆を書くようにしています。あまり、人のあらしを探すようにものは書きたくはないのですが、でも、あまりにも目に余りますので、つい書きたくなってきました。

五、目に余るといいますのは、大多数の記者（識者や論者）の通弊なのですが、現実の問題の「認識」はそれほど間違いではないのですが、その問題の「解決策」にな

りますと、まったくダメなのです。私から見ますと、多くは、ますます悪くなると思えるのです。

六、それは、新聞に意見を直接書いている「論者」だけではなく、政府や審議会などの対策を紹介している記事についても同様です。日本人のこのころのあり方が基本的に間違っているわけですから、当然といえば、当然です。

七、特に教育問題は、将来の日本人のあり方に関わりますので、日本の今後を予測する上でとても重要ですが、それがまったく对症治疗的で、ただ流されていくだけに終わっています。目指すべき価値が見えていません。

八、来年がよい年になりますように、お祈りいたします。

月刊 このころのとも 第九卷 十二月号 （通巻 一八号）	平成十年十二月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 （ひびきのさと 沙門）中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

